

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語教室の設置運営】

受託団体名 小松島市国際交流協会

1 事業の趣旨・目的

文化庁から小松島国際交流協会(以下、本協会)に委託された事業(以下、本事業)は、日本語学習をメインとして、外国人学習者の日常生活や子弟の教育、また日本の伝統的な家庭料理の講習や、近々予想される南海・東南海地震、台風等災害時における避難や対処方法などの他、多方面にわたって、必要な日本語を具体的にわかりやすくお伝えすることを目的とした。徳島市の南に位置する小松島市には、現在、219人の外国人が在住している(2009年12月末の資料による)。そのうち中国籍が158人、韓国・朝鮮籍23人、フィリピン籍18人であり、その3カ国で全外国人の91パーセントを占める。ことに、中国から来日した外国人が72パーセントと、最も多い。

本事業は、小松島市内の各会場で、2009年7月26日から同年12月13日までの20回の日曜日を活用して展開された。20回のうち、日本語教室に14回が割り当てられ、料理教室に3回、みかん狩りに1回、防災・警察教室に1回、阿波踊り教室に1回が割り当てられた。よって、本事業は、さまざまな性格の活動が複合的に展開された事業だったといえるが、20回のうち日本語教室が14回という数字からも分かるように、日本語教室が本事業の中心であった。

本事業の日本語教室をコーディネートするに当たって、「誰が、何を、どのように教えるか」という問題をどのように考えたかを明らかにしておかなければならない。この問題について、以下の3点に留意した。

- 1、小松島国際交流協会の会員が教える
- 2、普通の日本人ができる日本語支援とは何かを考える
- 3、日本人支援者と外国人学習者との相互学習を目指す

まず、「1、小松島国際交流協会の会員が教える」について説明する。日本語教室で「誰が教えるか」を考えたとき、日本語指導および支援に熱意のある本協会の会員が担当することを基本に据えた。日本語を教えるという経験が、指導者のみならず本協会に有形無形のものを残すと考えたからである。本協会では、平成19年度に、徳島県主催で48時間の「地域日本語指導ボランティア養成講座」(以下、ボランティア養成講座)が実施された。その後、本事業までに講座を修了した会員によって日本語教室や日本語勉強会が実施され、日本語を教えられる人材として成長しつつあると同時に、日本語教室の必要性に対する機

運が盛り上がりつつあった。本事業では、会員の3～4人が教師役(指導者)を担当し、別の1～3人が日本語支援者(アシスタント)としてクラスに参加し、経験豊富な日本語教師が各クラスを監督するという形をとった。

次に、「2、普通の日本人ができる日本語支援は何かを考える」について説明する。いわゆる専門的な日本語教育を勉強していない一般会員(ボランティア養成講座を受講している)も、普通の日本人として日本語支援に関わってもらいたいと考えた。そのためには、普通の日本人ができる日本語支援の具体的な方法を模索しつつ進めることになった。

最後に、「3、日本人支援者と外国人学習者との相互学習を目指す」について説明する。本日本語教室では、日本人支援者は教える人・助ける人で、外国人学習者は教えられる人・助けられる人という役割の固定化は避けたかった。日本語支援者も外国人学習者も共に学びあえる相互的な場としたかった。

次に、「何を教えるか」という問題について、「語彙」、「文型」、「知識」の3つが重要であると考えた。「語彙」と「文型」を学ぶためには、体系的に構成・作成された市販の教科書を使用することが最も有効であり、かつ近道であると考え、『みんなの日本語Ⅰ』、『みんなの日本語Ⅱ』、『みんなの日本語中級Ⅰ』を教科書として使用した。これらの教科書は、各国語訳が揃っており、指導する側にとっても『教え方の手引き』が出版されていて、日本語教育の経験が多くない支援者にとって助けになる。また、先述のボランティア養成講座においてもこれらの教科書が用いられたので、支援者は基本的な知識が理解されていた。「知識」を学ぶためには、日本の昔話や伝統的な習慣や遊びを紹介し、日本人なら誰でも知っている知識を紹介しようと考えた。この「知識」を学ぶ時間として、3時間目を活用した。この3時間目をつくったことが、結果的に大変おもしろく自由に活動できることになり、相互学習の第一歩になったと考えられる。この点は後で詳述する。

具体的に、日本語教室を次のように構成した。1回の日本語教室を1時間目、2時間目、3時間目と区切り、1、2時間目に教科書を使った日本語教育を実施し、3時間目は自由に活動を展開した。3時間目は、紙芝居や絵本の読み聞かせをしたり、日本の遊び(あやとり、かるた)を教えたりといった多様な活動をした。また、学習者に自国を紹介してもらう時間として活用した日もあった。

本事業は、「外国人学習者が暮らし易くする」ことが第一義の目的である。しかし、何年か外国人支援に関わってきた人が共通して感じることは、「教えることは学ぶこと」ということである。よって、本事業は、二義的には、日本人支援者の「生涯学習の場」になると考えた。上記のような方法論を採用したのも、外国人学習者に関わることで本協会の会員が成長することを期待したためである。

以下、本報告では、14回の日本語教室の取り組みを中心に報告する。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	出席者	議題	会議の概要
7月12日	岩浅昌昭、田村澄香、 亀代 豊、白山林一、 村上治郎	本事業の進捗状況	・進捗状況の報告 ・外国人募集状況
9月8日	岩浅昌昭、田村澄香、 亀代 豊、白山林一、 村上治郎	防災教室の準備	・警察、消防、小松島 市役所防災安全課の役 割と手順の相談
11月10日	岩浅昌昭、田村澄香、 亀代 豊、白山林一、 村上治郎	野外活動みかん狩りの準 備	・参加者の送迎の手順 ・お弁当の手配

注 日本語教室の準備のために、日本語指導者(支援者)が7月16日(5名)、7月24日(2名)、7月28日(5名)の3回集まって、ニーズ調査表の作成、担当クラスの割り当て、日本語指導のデモンストレーションなどを行った。これは上記の表に含まれていない。

3 日本語教室の開催について

- ① 日本語教室の名称:「わかる！できる！！日本語教室」
- ② 開催場所:小松島市ふれあいセンター立江、小松島市総合福祉センター、花水木、勝浦町松下観光みかん園
- ③ 学習目標:日本で暮らしていく上で必要な語彙、文型、知識を学ぶ
- ④ 使用した教材・リソース:『みんなの日本語Ⅰ』、『みんなの日本語Ⅱ』、『みんなの日本語中級Ⅰ』、その他、絵本、日本語かるた、新聞などの生教材
- ⑤ 受講者の募集方法:7月10日に、徳島新聞に募集チラシを折り込む。また、本協会会長や副会長以下、何名かが、教育委員会、小松島市小学校校長会、消防署、小松島市役所、幼稚園・保育所の数ヶ所、事業所などなどに、数度にわたって訪問・説明して廻った。それから、小松島市内、徳島市内の適当な場所にポスターを貼った(ポスターを添付する)。マスコミにも、徳島新聞に写真付きで掲載された(8月14日付け、新聞コピーを添付する)。また、四国放送ラジオで紹介されたり(8月25日「えんやこらワイド8:46~8:56」)、四国放送テレビ「5時からローカル」(17:00~17:50)で取り上げられた。
- ⑥ 受講者の総数 13 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)
受講者を国別、男女別、年代別、来日目的で整理すると、以下のようになる。
1)国別では、小松島市在住の中国人が多いことと符号し、中国の学習者が多かった。

中国	7
ロシア	4
コロンビア	1
ベトナム	1

2)男女別では、日本人男性と結婚した外国人妻が多かった。外国人夫はいなかった。

男	3
女	10

3)年代別では、10代の学習者は日本の中学校に在籍している人もいるが、中学卒業したもののその後の進路が定まっていない人、現在大学進学に挑戦中の人など多様である。つまり、本人の意志ではなく親に連れられて来日し、高校や大学への進学を目指して、現在浪人中という学習者である。20代の学習者は、外国人妻や技術研修生などさまざまであり、30代以上は、全員が外国人妻である。

10代	3
20代	5
30代	3
40代	1
50代	1

4)来日目的では、外国人妻と、その連れ子(生徒・学生)が最も多かった。技術研修生は小松島市内に相当数在住すると思われるが、参加者は少なかった。

外国人配偶者(妻)	6
生徒・学生	3
技術研修生	2
大学・大学院生	2

⑦ 開催時間数(回数) 全 60 時間(内、日本語教室に 42 時間) (全 20 回(内、日本語教室に 14 回))

⑧ 日本語教室の具体的内容

回	開催日時	時間数	参加人数	国籍・母語(人)	教授者・補助者人数	内容
①	2009年 7月26日 開講式 料理教室1	3時間	6人 (託児3人) (注1)	ロシア(3人)、ベトナム(1人)、中国(2人)	教授者2人 補助者4人 通訳1人	幼稚園のお弁当
②	8月2日 阿波踊り教室 (地域の習慣を学ぼう)	3時間	5人 (1人)	ロシア(2人)、ベトナム(1人)、中国(2人)	教授者(日本語学習)1人 (阿波踊り1人) 補助者3人 阿波踊り連より3人	「梅雨」に関することば、阿波踊り
③	8月9日 日本語教室1	3時間	3人 (2人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(1人)	教授者1人 補助者3人	『みんなの日本語Ⅱ』26課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』1課、3時間目：紙芝居「浦島太郎」
④	8月23日 日本語教室2	3時間	3人 (3人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(1人)	教授者1人 補助者4人	『みんなの日本語Ⅱ』27課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』1課、3時間目：紙芝居「つるのおんがえし」
⑤	8月30日 日本語教室3	3時間	11人 (5人)	ロシア(3人)、ベトナム(1人)、中国(6人)、 コロンビア・スペイン語(1人)	教授者1人 補助者3人	『みんなの日本語Ⅰ』4課、 『みんなの日本語Ⅱ』28課、 『みんなの日

						本語中級Ⅰ』1課、3時間目：紙芝居「かさじぞう」
⑥	9月6日 日本語教室4	3時間	7人 (4人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(4人)、 コロンビア・スペイン語(1人)	補助者2人	『みんなの日本語Ⅱ』29課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』2課、3時間目： 防災のことば
⑦	9月13日 防災教室	3時間	8人	中国(8人)	教授者1人 補助者3人 通訳1人	警察による地震対策、小松島市役所防災課による台風対策、消防による火事と救急対策
⑧	9月20日 日本語教室5 (中国の習慣を学ぼう！)	3時間	6人 (4人)	ロシア(2人)、ベトナム(1人)、中国(3人)	教授者1人 補助者3人	『みんなの日本語Ⅱ』30課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』3課、3時間目： 中国の訪問時のあいさつ
⑨	9月27日 日本語教室6	3時間	6人 (5人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(3人)、 コロンビア・スペイン語(1人)	教授者1人 補助者2人	『みんなの日本語Ⅱ』31課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』3課、3時間目： 国際スピード郵便EMSの説明(注)
⑩	10月4日 日本語教室7 (ロシアの習慣を学ぼう)	3時間	5人 (3人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(2人)、 コロンビア・スペイン語(1人)	補助者3人	『みんなの日本語Ⅱ』32課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』4

	う！)					課、3時間目： ロシアの文化、 食習慣など
⑪	10月11日 日本語教室8 (コロンビア の習慣を学ば う！)	3時間	7人 (4 人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(4人)、 コロンビア・スペイン 語(1人)	教授者1人 補助者2人	『みんなの日本語Ⅱ』33課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』4 課、3時間目： コロンビアの 地理や服装、食 習慣など
⑫	10月18日 日本語教室9	3時間	6人 (5 人)	ロシア(2人)、ベトナム(1人)、中国(3人)	教授者1人 補助者3人	『みんなの日本語Ⅱ』49課、 課、3時間目： 自己紹介をしよう
⑬	10月25日 日本料理教室 2	3時間	6人 (3 人)	ロシア(1人)、中国(5 人)	教授者1人 補助者4人 通訳1人	徳島地元の日本料理を覚えよう 鮭寿司、おすましなど
⑭	11月1日 日本語教室 10	3時間	6人 (4 人)	ロシア(3人)、ベトナム(1人)、中国(2人)	教授者1人 補助者2人	『みんなの日本語Ⅱ』34課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』5 課、3時間目： 徳島の方言を 覚えよう「徳島の ナイ形とナ カッタ形」
⑮	11月8日 日本語教室 11	3時間 間	4人 (4 人)	ロシア(1人)、ベトナム(1人)、中国(2人)	教授者1人 補助者4人	『みんなの日本語Ⅱ』35課、 『みんなの日本語中級Ⅰ』5 課、3時間目： 「お元気です

						か」ゲーム
⑩	11月15日 日本語教室 12 (医療機関の かかりかた)	3時間	7人 (4人)	ロシア(1人)、中国(5人)、コロンビア・スペイン語(1人)	教授者1人 補助者1人	『みんなの日本語I』18課、 『みんなの日本語II』50課、 3時間目:眼科と整形外科の かかりかた
⑪	11月22日 みかん狩り (地域の習慣を学ぼう)	3時間	10人 (教室以外の 外国人19 ヶ国 80人)	ロシア、中国、インドネシア、コロンビア等	補助者4人 他、本会会員20名が参加	みかん狩り 各国のダンス等
⑫	11月29日 日本語教室 13	3時間	7人 (4人)	ロシア(1人)、中国(5人)、コロンビア・スペイン語(1人)	教授者1人 補助者3人	『みんなの日本語I』19課、 『みんなの日本語II』36課、 『みんなの日本語中級I』6課、3時間目: 日本語カルタ
⑬	12月6日 日本語教室 14	3時間	3人 (2人)	ロシア(1人)、中国(2人)	教授者3人 補助者5人	『みんなの日本語I』20課、 『みんなの日本語II』37課、 『みんなの日本語中級I』6課、3時間目: 年賀状をつくらう

⑳	12月13日 日本料理教室 3 閉講式	3時間	5人 (4人)	ロシア(1人)、中国(4人)	教授者1人 補助4人	子どもの好きな料理(お好み焼き、焼きそば等)
---	------------------------------	-----	------------	----------------	---------------	------------------------

注1 「参加人数」の下の()の数字は、託児をした子どもの数である。

注2 9月27日の「国際スピード郵便EMSの説明」は、郵便局が希望して実施された活動である。

注3 補助者に保育スタッフは含まれていない。

⑨ 特徴的な授業風景

(1)日本語教室① 日本料理実習の報告(7月26日)

今度の日本語教室のニーズを開講前に調査したところ、幼稚園などの教育現場から、「外国人のお嫁さんたちが、おにぎりが上手に握れない。作れてもきれいな三角おにぎりのできないので、それが原因で子供たちがからかわれたり、いじめられたりする。ひどい子は『ぼくはおにぎりのできない金髪のママなんかいない』と言う」との声があった。また、学習者からは「かわいなお弁当を日本人のママたちのように作って、遠足に持たせたい」「調理の日本語がよくわからないので、本や料理番組を見ても、作り方がよくわからない」「おかあさん(中国人)がおにぎりを握るといつもソフトボールになってしまう。学校に持っていくのにかっこわるい」との声も聞かれた。そこで、当日本語教室では、お弁当作り、郷土料理、日本の家庭料理の3回の料理教室を企画した。

「千切り」「かつらむき」「みじん切り」などの調理用語を学習して、実習した。また、ウインナの飾り切りを習ったり、おにぎりも学習者と補助者が助け合って作っていた。



(2)日本語教室② 阿波踊り実習の報告(8月2日)

徳島の生活に阿波踊りは欠かせない。徳島市の阿波踊りが8月12日～15日なので、小松島市の阿波踊り連の八千代連に阿波踊りを教えてもらった。八千代連連長の辻 義徳氏以下、踊り子、鳴り物が4名来て、男踊り、女踊りの踊り方、鳴り物(鐘・太鼓、三味線など)の弾き方、踊りの日本語を学習した。学習者は阿波踊りを見に行ったことはあるが、

阿波踊りに参加したことはないということで、熱心に学んでいた。本協会では、毎年 7 月の小松島港まつりで、「外国人阿波踊りコンテスト」を催している。来年のこのコンテストの参加につながるよう、外国人学習者に周知した。この授業は、徳島新聞で紹介された。(添付資料)



(3)日本語教室③の報告(8月30日)

〈1、2時間目〉

初級1クラス：学習者1人(中国1人)

『みんなの日本語Ⅰ』4課を、マンツーマンで日本語指導

初級2クラス：学習者5人(ロシア3人、ベトナム1人、中国1人)

『みんなの日本語Ⅱ』28課を、クラス形式で日本語指導

中級クラス：学習者5名(中国4人、コロンビア1人)

『みんなの日本語中級Ⅰ』1課を、クラス形式で日本語指導

託児：子ども5人(託児係り5人)

〈3時間目〉紙芝居「かさじぞう」の読み聞かせ

3時間目は、子どもも託児係りも入って、全員参加で紙芝居「かさじぞう」を聞いた。全員が静かに聞いたが、特に子どもが熱心に聞いてくれた。読み聞かせの際、キーワードに注意して読むように気をつけた。3時間目に何をするかは担当者が決めた。本事

業を実施するにあたって、「普通の日本人ができる日本語支援は何かを考える」という課題を設定したが、日本人なら誰でも知っている内容の紙芝居や絵本の読み聞かせは、その具体例のひとつである。



(4)防災教室の報告（9月16日）

小松島市は大きな台風が年に数回やって来て、大きな被害が出ることもある。また、海に面しているため、地震の際には津波が考えられる。そして、外国人学習者も火災や事件事故で、110番・119番通報をしなければならないこともある。そこで、学習者にはぜひともその危険性、対処の仕方を学んでほしいと思った。

小松島警察署にて小松島警察署、小松島市防災安全課、小松島市消防本部の協力を得て、防災教室を実施した。学校・幼稚園の運動会と重なったり、仕事があったりと学習者は中国人が8人だった。他に、本協会の会員、市民も20名ほど参加した。

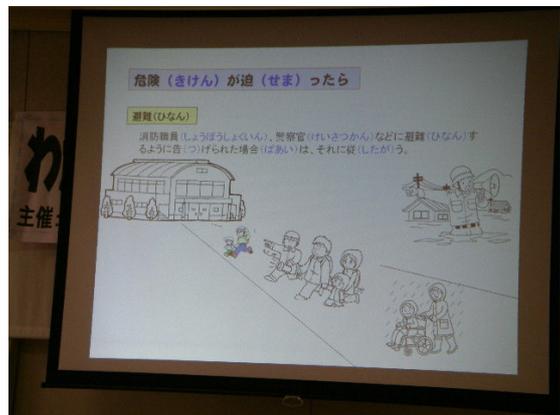
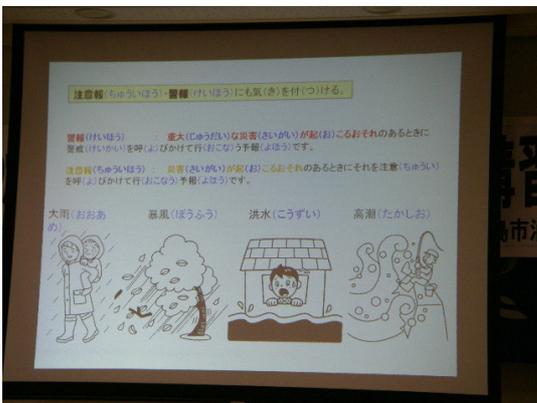


〈1時間目〉徳島県警の木田災害対策官による地震の話

小松島市において地震が起こったら、どのくらいの時間で津波が来るか、津波の時はどこにどうやって避難するかを地震対策のフィルム映写を含めて、説明を受けた。

〈2時間目〉小松島市防災安全課の新濱防災監による台風の話

台風の被害、台風情報の見方をパワーポイントの資料で説明を受けた。台風情報の日本語を学ぶことができた。



〈3時間目〉小松島市消防本部磯部予防係長による火事・救急等の話

火事の通報のしかた、救急車の利用のしかた（まず、無料であることから始まった）を説明を受けた。また、AED の使用方法も学んだ。最後は外に出て、水消火器を使い、消火の実習をした。



(5) 日本語教室 5 の報告 (9 月 20 日)

〈1、2 時間目〉

初級 1 クラス : 学習者なし

初級 2 クラス : 学習者 2 人 (ロシア 1 人、ベトナム 1 人)

『みんなの日本語 II』 30 課を、クラス形式で日本語指導

中級クラス：学習者4人(中国3人、ロシア1人)

『みんなの日本語中級I』3課を、クラス形式で日本語指導

託児：子ども4人(託児係り4人)

(3時間目)「中国の習慣を学ぼう！」(担当：黄、王、河野)

中国の学習者3名が、「中国の習慣を学ぼう！」と題して、中国の訪問時のあいさつの仕方や対応の仕方を、中国語を使用して寸劇の形式で演じてくれた。中国では、一般的に手土産を持参し、家人は遠慮しつつ受け取り、またそれをすぐ開けては失礼になる、家に迎え入れた客を厚遇しなければいけないことなどを具体的な演技で見せてくれた。その寸劇を見て、今度は日本人が日本のやり方を即興で演じた。次に、100年前の日本のやり方が演じられた。日本の古い習慣は中国と似ていると話し合われた。次に、ロシアの学習者がロシア語でロシアのやり方を演じてくれた。ロシアの習慣は現在の日本と似ていた。ベトナムの学習者は恥ずかしがって演じなかった。参加者みんなが自国の習慣や日本の習慣などについて口々に話して、いろいろな国のことばが飛び交った。日本と自国の習慣を対立的に捉えると、疑問や不満として閉塞感に陥りがちだが、たくさんの国の習慣が紹介されることで、習慣の違いが相対的・客観的に捉えられたのではないかと感じられた。

⑩ 活用した日系人等(日本語を母語としない)の名簿

氏名	母語(国籍)	来日年(日)数	参加回数	当該教室での役割
該当者なし				

⑪ 支援者の名簿(⑦以外)

氏名	所属	専門分野及び日本語教育に関する資格	参加回数	当該教室での役割
田村澄香	徳島県国際交流協会 嘱託日本語教師、元徳島大学非常勤講師、元ヒューマンアカデミー 徳島校日本語教師養成講座講師、ボランティア養成講座講師	日本語教育能力検定試験合格、日本語学で博士号(学術)取得、420時間修了	14回	コーディネーター、日本語指導、日本語支援(注1)、託児

村上久美子	小松島市国際交流協会・副会長	ボランティア養成講座修了	19回	日本語指導
米山健作	小松島市国際交流協会会員	ボランティア養成講座修了	14回	日本語指導
吉岡百合子	小松島市国際交流協会会員	ボランティア養成講座修了	12回	日本語指導、託児
春山節子	小松島市国際交流協会会員	ボランティア養成講座修了	3回	日本語指導、託児
福本敦子	小松島市国際交流協会会員		13回	日本語支援、託児
岡山一代	小松島市国際交流協会会員	ボランティア養成講座修了	13回	日本語支援、託児
大西和代	小松島市国際交流協会会員	ボランティア養成講座修了	14回	日本語支援、託児
村上治郎	小松島市国際交流協会・副会長		1回	託児

注1 「当該教室での役割」欄の「日本語指導」は、クラス形式で教えることを指し、「日本語支援」は、1対1で漢字指導や3時間目の読み聞かせ、話し相手などを担当したことを指す。

4 事業に対する評価について

① 当初の学習目標の達成状況

指導のポイントとして「語彙」、「文型」、「知識」の3つが重要だと考えたことと先述した。「語彙」と「文型」について、初級クラス1では、『みんなの日本語Ⅰ』を4課、18課、19課、20課を修了した。初級クラス2では、『みんなの日本語Ⅱ』を25課から37課まで、中級クラスでは、『みんなの日本語中級Ⅰ』を1課から6課まで修了できた。当初の学習目標について、一応の達成をしたとよいてよいと考えられる。「知識」を学習するために日本の昔話の紙芝居などを活用したことは先述した。

留意点の「1、小松島国際交流協会の会員が教える」について、当初の目標のとおり、3クラスを本協会の会員が最後まで教えることができた。次は、指導にあたったYさんの感想である。

(略)本当に無我夢中でした。学習者の熱心さに驚き、それに応じる為に勉強せざるを得ませんでした。特に、助詞、助動詞の意味を今回は勉強したように思います。(略)意味の方を学習者は知りたがっているということで、自分自身の教え方に新しい方法を見つけた様な気がします。(日本語指導を担当したYさんの感想より)

次に、「2、普通の日本人ができる日本語支援とは何かを考える」と「3、日本人支援者と外国人学習者との相互学習を目指す」を達成するために3時間目を活用した。まず、担当者を決めて自主的に活動内容を考えてもらった。また、学習者自身にも活躍してもらった。具体的な活動内容と担当者を以下に記す。

- ・ 8月 2日 「梅雨」に関することばと漢字 担当：田村
- ・ 8月 9日 紙芝居「浦島太郎」 担当：田村
- ・ 8月 23日 紙芝居「つるのおんがえし」 担当：岡山
- ・ 8月 30日 紙芝居「かさじぞう」 担当：春山
- ・ 9月 6日 防災のことば 担当：村上
- ・ 9月 20日 中国の習慣を学ぼう！（中国の訪問時のあいさつや手土産の習慣の説明）
担当：黄、王、河野
- ・ 9月 27日 国際スピード郵便EMSの説明 担当：郵便局職員
- ・ 10月 4日 ロシアの習慣を学ぼう！（ロシアの文化や民芸品の紹介） 担当：ナタリア
- ・ 10月 11日 コロンビアの習慣を学ぼう！（コロンビアの地理やおやつ、コーヒー、民族衣装などの紹介） 担当：ルイサ
- ・ 10月 18日 自己紹介をしよう 担当：田村
- ・ 11月 1日 徳島の方言を覚えよう「徳島のナイ形とナカタ形」 担当：田村
- ・ 11月 8日 「お元気ですか」ゲーム 担当：田村
- ・ 11月 15日 目の病気になったとき（眼科） 担当：谷先生夫妻
- ・ 11月 29日 日本語カルタ 担当：田村
- ・ 12月 6日 年賀状を作ろう 担当：村上

これまで、あまり外国人と話したことがない会員も、日本語の通じない学習者に何とかわからせようとして、奮闘する姿が見られた。8月2日に「梅雨」に関することばと漢字を教えたとき、「梅雨晴れ」ということばを導入した。「はれ」ではなく「ばれ」となるという連濁が指導のポイントだった。のちに、ある学習者から、「8月2日に先生の講義に「梅雨晴^ばれ」がありました。「晴」この文字が好きで、私の子供の名前は「晴美」と付けました。うれしいです」（原文のまま）という感想をもらった。教えるほうの意図と学習者の感想は一致しないことが多いが、思いがけない反応が嬉しい出来事だった。

② 学習者の習得状況

「① 当初の学習目標の達成状況」で示したとおり、学習者はそれぞれの教科書の学習をすすめた。習得状況をはかるためにテストなどを実施したわけではないが、学習者の日本語習得に一定の効果があつたと考えられる。そう感じられた例をいくつか挙げる。

まず、本事業終了後に、学習者に感想を聞いたところ、感謝の気持ちとともに、「よく

勉強になった」、「ゲームが楽しかった」、「友達ができて嬉しかった」などの声が全員から聞かれた。

次に、ある学習者からの感想を紹介する。この学習者は、2004 年に来日し、日本人男性と結婚して小松島市に在住する中国人妻である。(濁音の間違いや少し不自然だと思われる表現もあるが、手をいれなくてそのまま報告する。)

尊敬語、謙譲語はわたしに一番むずかしいです。何回も繰り返し本を読んだり、辞書で調べたり、なかなか理解できない。長い間にずっと分かりませんでした。今度の日本語教室をとおして、やっと分かりました。とてもうれしいです。まだ日本語ではっきり言わない表現があります。例え「すみません、あいにく……」は相手の気持ちのとおりできない言い方や「うーん、そうですねえ」、「どうでしょう」など否定的な言い方、日常生活でよくつかわれてるんです。でも、私はどうしても上手にできません。今度の勉強する時、先生の話しを聞いたり、教科書の文法を読んだり、少しずつ分かりました。今から日本での生活にとっても役に立つと思います。うれしいです。先生のみなさん、親切に教えてくれて、ありがとうございました。

日曜日は、みなさん休み日です。わたしたち外国人勉強のために、先生たちは家事をおいて、忙しくても教えに来てくれます。本当に感動されます。先生の優しさや親しみに今の日本語教室は好きになりました。私の子供 Y くん「日曜日の日本語教室はママといっしょに行きたい」とよく言いました。H ちゃんも先生みなさんのおかげで、元気で、大きくなりました。

私、Y くん、H ちゃんまだこのような日本語教室を勉強に来たいです。

5 か月の間に、先生みなさん、お疲れ様でした！ 2009 年 12 月

(中国からの外国人妻の感想より)

次に、学習者に起こった態度の変化や考え方の変化も習得状況の一つのものさしになる。N さんという外国人妻について、その方の子どもが通う保育所の園長先生は、「N さんが明るくなった」と言っておられた。また、この夫(日本人)からは、「妻の日本語が丁寧になった」という声が聞かれた。N さんは、日本語教室で覚えた敬語を家庭の電話機の前にはって、応対をしていたようである。N さんの指導にあたった日本人の感想から学習者の変化が読み取れる。

学習者(外国人妻の N さん)の進歩が見る見るうちに上ってくるのを感じました。これは、日本語教師の醍醐味だと思いました。彼女がだんだん明るくなり、自分のことを話してくれるようになり、まわりの幼稚園の先生・保護者のみなさんが、「N さんの日本語、最近、すごいですね」とおっしゃるのを伺うと、本当にうれしくなります。今回、一番うれしかったのは、このことかもしれません。(日本語指導を担当した M

さんの感想より)

外国人妻は、普段、日本人夫の男性語を聞いて生活するため、男性語を覚えてしまいがちである。またサバイバルで日本語を覚えた場合、その日本語は短く、助詞なども省かれ、いいさしが多いなど、いわゆるきちんとした文になっていないことが多い。今回の日本語教室の女性学習者にも、当初、そのような傾向が顕著にみられた。コミュニケーションに問題がない(とみられる)学習者から「先生、孫、おるか？」と聞かれたときは、面食らった。

学習者側の問題点をひとつ挙げると、11月1日に「徳島の方言を覚えよう」という題で「徳島のナイ形とナカッタ形」を指導したことがあった。共通語の「食べない」、「食べなかった」は、小松島では「食べん、食べーへん」、「食べなんだ、食べんかった」と言って、方言との違いが大きい。指導の目標は「話すことではなく、聞いて理解できる」という点にしぼった。しかし、外国人妻の一人から、「徳島方言は勉強したくない」という声が上がった。留学生や技術研修生のようにいずれ帰国することがわかっている学習者なら方言の学習は必須とは思わないが、小松島市でずっと暮らす立場の学習者からそのような声があるということは、地域にとけ込む意思がないのかと感じられた。

③ 日本語教室設置運営の効果、成果

ここでは、「託児をしたことによる子どもへの影響」、「学習者間の協力」、「本事業への学習者の協力」、「地域への広報の影響」という4点について説明する。

まず、本事業の特徴の一つとして、託児をしたことが挙げられよう。託児は、外国人妻にも子どもにも良い変化が目に見えて現れた。ある子どもは、いたずらをしていても、「日本語教室に連れて行きませんよ」と言うと、いたずらをやめたそうである。この子の幼稚園の園長先生は、「I君が人間がまるくなった」と言い、「日本語教室って何をしているんですか」と、見学に来るというハプニングがあった。「母親の髪の毛の色が他の人と違う」「お弁当が他の子と違う」というようなことが、子どもにとってもストレスになっていたことが推測される。また、託児係りは、「お母さん、日本語の勉強してる、偉いね、終わるまで待ってようね」と話しかけ、子どもに母親を尊敬させるように導いた。

ある学習者は、二人目の子どもを出産後、約15日後には日本語教室に出席していた。このような日本語教室を如何に待ち望んでいたかが推測されるが、本事業の日本語教室で託児をしたことが、このような学習者の出席を可能にしたと考えられる。

託児は大変であった。怪我をさせないように、3時間退屈させないようにと大変気を使った。しかし、次のような感想をもらったときは、驚くとともに励まされた。最も熱心に託児係りを担当してくれた会員の感想である。

私は日本語を教える勉強を何もしてこなかったもので、最初は戸惑いました。しかし、

真面目に日本語の勉強をするお母さん方の子供さんがおられ、ベビーシッターをすることで私の役割的なことができ、大変嬉しかったです。きちんとサポート出来たかどうかは、半信半疑ではありますが、活躍できる場を与えて頂いたことには感謝いたします。(Fさんの感想より)

この会員は絵本やおもちゃなどを家から持参し、献身的に託児にあたってくれた。この会員には日本語指導を担当していた会員も励まされることが多く、一人の善意が当の子どもだけでなく、周りの人々にも及ぼされていくという事実を感じた。また、別の託児を担当した会員からも、「特に感じたことは、学習者が安心して日本語学習に取り組むことができるようにするためには、保育は不可欠だと痛感しました。」との感想がよせられた。

外国人妻の場合、来日後すぐ妊娠・出産し、日本語を学びたいと願いつつも叶えられないでいる事例は多いと考えられる。外国人妻は不全感のある日本語ではなく、母語で子どもを育てる。そのことが子どもの日本語習得にも影を落とすという事実を考えれば、本事業で託児をしたことは大変良かったと思われる。生後2週間めくらいから日本語教室に連れて来られていた赤ちゃんが、本事業終了時には首がすわり、にこにこ笑っていた姿を見たとき、私たちの苦労も吹き飛ばす思いであったことを付け加える。

次に、「学習者間の協力」について、学習者どうしが仲良くなり、協力する姿がよく見られた。母語で話していたので内容は分からなかったが、パソコンの学習ソフトを教えて合ったり、情報交換をしていたのではないかと思われる。また、本事業中に日本語能力試験があったが、誘いあって行ったようである。日本語教室の副次的な成果であろう。

次に、「本事業への学習者の協力」について述べる。3時間目を学習者にまかせたことが何回かあった。すると、当方の予想以上に熱心に準備や活動を展開してくれた。ある時は、学習者の父親も参加して、コロンビアのおやつやコーヒーを皆に振舞い、民族衣装を会員に着させてくれた。日本人にとって遠い国であったコロンビアが、近しいなじみ深い国になった。

「知る」ことの大切さが大切だと改めて実感し、初心にかえる気持ちであった。また、みかん狩りの時などは通訳をかって出るなど、学習者自身が本事業に協力してくれ、助けられる機会が少なくなかった。

最後に、「地域への広報の影響」について、マスコミを活用して本事業を広報したため、日本人から声をかけられることがずいぶん多くなった。本事業が地域で暮らす外国人に対する理解のきっかけとなり、また理解が深まったのではないかと感じている。本事業をとおして、本協会の活動・努力が漢方薬のようにジワリと地域に効き目を広げていけたとしたら、当初の目的は達成されたといつてよいと思われる。

④ 地域の関係者との連携による効果、成果 等

ここでは、「防災教室」、「病気になったときの対応」、「日本料理教室」、「みかん狩り」に

ついて説明する。

まず、「防災教室」について、本事業では、警察、消防、小松島市役所防災課の3者が一つになって、9月13日(9:00~12:00)に防災教室を実施した。いきさつを述べると、小松島国際交流協会の会員の中に警察勤務の人がいて、その会員からまず警察の中で話が進み、そこから消防と小松島市役所防災課にも協力を求め、3者が「防災教室」を実施しようという相談がまとまった。迅速な対応がなされたということは、3者にこのような外国人を対象とした防災教室が必要との認識が以前からあったから。3者が協力して実施された防災教室は、初めての試みだった。

当日は、警察による地震対策、小松島市市役所防災安全課による台風対策、消防による火事と救急対策が説明された。それぞれパワーポイントを用いた図や絵による説明や、消火器の実演などをさせてくれた。外国人にとって貴重な経験になったのではないかと思われる。それとともに、担当した警察、消防、小松島市役所防災安全課の3者にとっても貴重な経験になったと話してくれた。

反省点を述べると、警察署集合という形で実施されたが、小松島市の警察署は新築されたばかりで大きい建物であるため普通の日本人でも入りにくい。普段の日本語教室で集合してから引率という形で案内すれば良かったと思った。それと、日程的に小学校の運動会と重なったことが残念だった。

次に、「病気になったときの対応」として、小松島市内の整形外科医と眼科医が説明に来てくれた。ちょうど、新型インフルエンザが流行しつつあった時期だったので、いろいろ質問ができて良かった。地元の医療関係者と学習者が顔なじみになっていることで、いざというとき双方が話しやすい地盤ができたのではないかと思われる。

それから、次に、「日本料理教室」を3回実施した。3回とも、外国人妻を念頭においた活動であり、指導にあたったのは地域の料理教師や会員、一般募集の住民であった。1回目は、「子どものお弁当が作れる」という目標で、おにぎり、ウインナーのたこ、チューリップ、クジラ、わかめの味噌汁などを実習した。日本で子どもを育てる場合、日本式のお弁当が作れる必要性は高い。野球ボールのようなおにぎりを子どもの遠足に持たせて、子どもがづらい思いをしたという話が耳に入っていたためである。2回目は、「客料理が作れる」ために、鮭寿司やお澄ましを実施した。3回目は、「日本人になじみ深い」という内容で、お好み焼きや焼きそばを実習した。会員の一人がおでんを差し入れてくれた。

最後に、「みかん狩り」について、みかん農家が協力してくれた。みかん農園が不便な場所にあるため、会員が送迎の手助けをした。その結果、教室以外にも19ヶ国80人という多数の外国人が参加してくれたが、混乱もなく無事に終えることができた。

以上のように、学習者が暮らし易くするために、小松島市内に在住するいろいろな立場の人が協力を惜しまなかった。

⑤ 改善点、今後の課題について(具体的に記述する。)

a. 現状

本協会は、2010年に設立20周年を数える。これまでも地域に根ざした活動を活発に行ってきた。しかし、日本語教室に関しては、数年前から開設していたものの活発とはいえず、当協会の活動のなかでは弱い分野であったといえる。また、小松島市内には他に日本語を学べる機関がないので、日本語を勉強したい学習者は近隣の市町村に行かなければならない状況であった。

本事業が終了した現在も定期的に、毎週、金曜日に日本語教室が継続されている。本事業で日本語指導にあたった本協会の会員と、本事業に参加した学習者が引き続き参加し、教科書の続きが指導されている。

さらに、学びたくても教室に来られない学習者の問題を解決する方策のひとつとして「通信教育」を実施することにした。学習者のレベルにあった問題を手紙で学習者に送付し、解答を送り返してもらい、日本人支援者が添削して送り返すという方法である。本事業でも学習者から最もニーズの高かった「漢字」にあまり時間をかけることができなかつたので、この「通信教育」の方法を用いて漢字学習の効果が上がるのではないかと期待している。

当地では、バスやJRがかなり不便であり、地下鉄が網の目のように張り巡らされた都会とは事情が異なる。本事業の学習者13人のうち、家族が送迎した学習者が2人、日本人支援者が送迎した学習者が5人、自分で運転して来た学習者が4人、JRを利用した学習者が1人、自転車で来た学習者が1人といった状況であった。来日間もない学習者であるほど、事業主や受け入れ家族が送迎しなければ日本語教室には来られないのである。送迎をしていていれば、本事業の参加者ももっと多くなつたはずである。そのためには学習者を取り巻く日本人の理解と協力が不可欠である。

b. 今後の課題

今後の課題として、「本事業の反省および課題」と、「日本人の認識」について述べる。

まず、「本事業の反省および課題」について、本事業が終了した後、反省会を実施した。運営の仕方や実務的な問題、例えば、事前準備、ボランティアスタッフの充実、日程調整、出席簿の管理、ネームプレートの作成、お茶の準備などをどうすれば良かったか、改善点が話し合われた。その中で、一人の日本人支援者が「もう少し、外国人、日本人みんなで協力しあって勧めるべきだと思いました。」と述べているように、日本語教室の運営を外国人自身に相談し、外国人の協力を求めても良かったと思われる。

また、地域日本語教室は、本来、地域住民との交流の場であつてよいと思われるが、外国人学習者は、日本語を学びたいと願つて日本語教室に足を運ぶ。「日本語

教師」と呼べる人材の育成が最も悩ましい問題であり、また喫緊の課題である。しかし、本事業で日本語指導を担当した会員は、本事業終了後、ますます意欲をもって日本語指導に当たっている。最も日本語指導に力を出した会員の一人からは、「小松島は市としては小さいですが、日本語教育は徳島ではトップレベルなところ、にできたらしらうれしいと思っています」との感想が寄せられ、今後も学習者の期待に応えるべく努力していきたい。

次に、「日本人の認識」について述べる。本事業を実施するにあたって、徳島新聞などで大きく取り上げられたり、また夜のゴールデンタイムの四国放送テレビで取り上げられるなど、マスコミを利用して広報活動をしたが、そのことによる問い合わせは皆無であり、また、学習者が増えるということもなかった。外国人にことばが壁となって情報が届いていないということは考えられるが、外国人を受け入れている事業所や日本人家庭に情報が届いていなかったとは考えにくい。外国人を受け入れている事業所、介護のための老人病院のみならず、家庭においても、日本語教室に行くことを勧める人がいなかったのかと思うと、残念であった。日本語習得に対しての誤解、例えば「日本で暮らしていれば、そのうちに自然に覚える」、「日本語教室には半年も行けば十分だ」、「子どもなんてすぐ上手になる」など、こういう類の誤った思い込みをどうすればいいだろうか。言語習得の困難さや異文化への順応の困難さを考えれば、外国人を取り巻く日本人の理解が不可欠であり、日本人の認識を高める必要があるといわざるを得ない。今後、「日本人夫を対象とした教室」や「姑を対象とした教室」、「中小企業経営者を対象とした教室」などが必要であり、課題は多いと言わざるを得ない。

c. 今後の活動予定, 展望

会員が一致協力し、本事業をやり遂げた意味は大きいと感じている。次は日本語支援や託児に力を出したHさんの感想である。

当初、私はこのプログラムに関して、あまり乗り気でなく、小松島交流協会の一員としての責任感から参加したのですが、和気藹々とした雰囲気の中で、日本語指導、日本料理教室、みかんがり等の様々な活動を体験させていただきました。楽しく活動できたことに感謝しています。これを機会に、小松島交流協会の金曜日の日本語教室の指導にもう少し力を注ぎたいと思います。(Hさんの感想より)

上記の感想からもわかるように、和気藹々とした雰囲気の中で本事業が進められたこと、それによって会員間の親しみが増したこと、その親しみは外国人をも巻き込んだことは収穫の一つであった。みかん狩りには、19ヶ国 80人という多くの外

国人が参加したが、日本語教室に参加している学習者だけは自然と集まり、賑やかにおしゃべりをしたり子どもを抱いたりといった様子で、まるでファミリーのようだったと報告された。

徳島市から南に位置する小松島市では、いまだに外国人に対する理解不足・認識不測がないとは言い切れず、「中国人が増えたから、野良犬がいなくなった」など酷い誹謗のこぼれをこれまで耳にすることがあった。本事業のような活動を継続することが、日本人の理解を深めることになればと願わざるを得ない。そのためには、「相手国を知ること」「話し合うこと」が第一歩である。次は、日本語指導や託児に力を出したSさんの感想である。

料理教室やみかん狩り、3時間芽の授業で行った紙芝居やゲームもすごく楽しかったです。これまで外国の方と接する機会のなかった私にとっては、雑談のなかで見聞きする事柄がどれも新鮮で興味深く、このような国際交流協会の場を与えて下さった事を本当に感謝しています。(Sさんの感想より)

上記の感想にもあるように、「雑談のなかで見聞きする事柄」が意外と重要な意味をもつことがあるのではないかと考えられる。

本事業は、外国人妻の苦労と困難さをひしひしと感じる機会であった。本事業があるまで、1～2人の限られた日本人だけと接触してきた学習者も多かった。ある外国人妻の「にほんじんとふつうにしゃべりたいです」(原文のまま引用)という感想を重く受け止めたい。また、外国人を母に持つ子どもも影響を強く受ける。日本人夫が帰宅が遅い、無口、非協力などである場合、子どもは集団生活をするまで殆ど日本語を聞かないで育つ。

本事業を通して、本協会の会員は、外国人、特に日本人夫と結婚して小松島市で暮らす外国人妻の気持ちに多少なりとも寄り添うことができた。そして、外国人の苦労を目の当たりにしたことが、本協会の会員の気持ちにさまざまなものを残したと感じられ、日本人支援者にとって大きな収穫である。次は、託児に力を出したFさんの感想である。

あっという間に時が過ぎ、もう最終日がきますが、ボランティア精神という心を忘れず、外国の方々とも交流を深め、もっと明るく楽しい、又、安全な社会が築き上げられる事を願っております。(Fさんの感想より)

最後に、学習者の将来とプライバシーを配慮して、報告できなかったこともあることを付け加える。会員の努力で、学習者の将来に展望を開くことができたと自負している。学習者に深くかかわったから、学習者の抱える事情が把握でき、適切な

対応ができたのである。

③その他参考資料

募集チラシ（ポスターも同一内容）、8月14日付の徳島新聞掲載の記事を添付する。